
Dear My Mum.

基本設定資料

Dear My Mum. ストーリー紹介

朝は決まった時間に起き、兄弟と集めた思い出の貝殻にお祈りをして一日が始まる。
プラネッタはどことなく寂しさを抱えて生活していた。

孤児院を出た最後の夜の、先生の笑顔に隠された悲しい顔が忘れられない。
悶々と時間だけが過ぎていく18歳の秋のこと。東の国から先生の便りが届く。
思い立ってすぐに、プラネッタはイギリスを飛び出した。

呼び起こすことを頑なに拒んでいた記憶を覚まし、先生の元へと急ぐ。
日本に着いた時は夕暮れで、秋の冷えた空気が茜に反射して輝いている様を、彼は美しく思った。

そして、ふと思い出す。故郷のこと、兄弟のこと、あの場所で起こった全てのことを。
けれどそれは決して戻ることのない過去。誰しもが前へ進んでいく中、プラネッタはその記憶に
縛られたままだった。だからこそ、こうしてまた先生の背中を追ってきてしまったのだ。

プラネッタは考えていた。もし会えたら、本当の名前を教えてもらおう。
「メアリー」は確かに自分の先生だったかもしれない。けれど、プラネッタが知りたいのは、「母親」の名前。
あの頃、お母さんと呼べずにいた大切なひとの、本当の名前だ。

自然と足が駆け出した。懐かしい匂いがした、あの頃と同じ何かを見た。プラネッタは母親に抱きつく。
ようやくの再会だったが、それはまるでたった今生まれてきたかのように、母親との初めての出逢いに思えた。

舞台 1

孤児院 *The Child's cradle.* チャイルズ・クリトル

イギリスのマン島 (Isle of Man) 南部の、人里離れた森林の中にある孤児院。一年をかけて平均気温が二十度を上回らない。

元は教会だった場所をそのまま孤児院として使っている。管理者は「シスター・メアリー」と名乗る謎多き日本人女性で、

子供たちの面倒から教会の設備経営をたった一人でこなす。教会の裏には麦畑が広がり、初夏にかけて金色に輝く。

放牧を行っており、牧地では多くの牛や純血種のラクタン羊が過ごしている。ほぼ自給自足で成り立つ。

また、迷い込んだマンクス猫と野良犬をヘレンが世話している小屋も存在する。



舞 台 2

東の国 シスター・メアリーの家

孤児院の最年少であったアルフの旅立ちと、病で衰弱していたフィオの死を見送ったあと、メアリーはイギリスから完全に離れ

故郷である日本に帰国する。後に結婚し、南房総の海沿いにある田舎町で夫婦で生活を始める。

プラネッタが18歳の年の秋がけ、メアリーから送られてきたポストカードを頼りに日本へやってくる。

無事再会を果たすことができたプラネッタは、メアリーに対して先生ではなく、母親として慕う姿を見せた。





プラネッタ (18歳)

16歳になり孤児院を出た後、イギリス本土(グレートブリテン島)に移住。
ケンジントン周辺の博物館で働きながら、古生物学について学んでいる。
先生がイギリスを離れ日本に帰国した知らせを受け、会いに行くことを決意。
記憶と一枚のポストカードを頼りに、衝動に任せ出発した。

兄弟とは数ヶ月に何度か手紙を交換して交流を保っているが、
仲の良かったフィオの死を2年経った今でも乗り越えられずにいる。

一つのことに集中することで余計な記憶が呼び起こされるのを防げる
ことに気づき、自分の体質と上手く付き合っている。

しかしそれは、悲しいことや受け入れられないことから逃げているだけでは
ないのだろうかと、また新しい悩みを抱えている。

子供の頃に、先生のことを「お母さん」と呼べなかったことを後悔している。
「Dear My Mum.」においての主人公(語り視点)にあたる。



 14歳の頃



シスター・メアリー

一人でなんでもこなすスーパーエリート。
その正体は他作品「今夜、晚餐は学校で。」の主人公、畑中恵林である。

イギリスに来た際に「アイム エリン」と自己紹介したものの
「アイム メアリー」に聞き間違えられ、訂正する機会を得られず
以降メアリーと名乗っている。

子供たちからは「先生」の愛称で親しまれている。
本名を明かしたことはないが、日本の昔話や童話、実体験などを語り聞かせる。
ある人物を捜すためにイギリスまでやってきたが、成り行きで子供の面倒を
見るようになってからはすっかり諦めてしまっている。

子供たちには社会に出ても困らないように、勉強だけでなく人の優しさや
正しさを説いている。「Dear My Mum.」においての「あなた」にあたる。



↑ 畑中恵林